年以上前から子供たちを受け入れ、農業体験に取り組んできた。食べ物をどういう人たちが、どう生産しているかを体験を通して理解してもらえるから。

農業後継者育成は、担い手育成だけではない。消費者一人ひとりが農業後継者と考えている。女性が十勝農業の一翼を担っている。女性自身が意識改革し、経営のパートナーという強い意識を持つことが発展に重要になっている。

発展は努力の結果

矢野　馬の尻を追いながらの農業、戦後の親世代が苦労してきた時代も子供ながらに知っているので、今の十勝農業は素晴らしい発展を遂げた。厳しい冷厳な環境で、皆さんが少しでもきょうより明日、明日よりもあさってと、一つひとつ努力してきて積み上げた結果だと思う。

司会　十勝農業の未来予想は。

愚直に土に向き合いたい

平　もう100年土作りに取り組むと、相当面白い時代になる。手を抜かず、愚直に土に向き合う農業者でありたいし、後継者もそう育てたい。

ＴＰＰは反対の声が大きいのは当事者として当然。ただ、自由貿易を否定しているわけではない。得意な分野や神経質な分野が各国にある。そこに配慮した上で、グローバル化のルールを出すべきだ。

産地の生産責任、供給責任を果たすことが前提だが、原料型作物の産地だからこそ、（自由化などに対して）理論武装は必要。今、ＪＡ青年部が取り組んでいるポリシーブック（政策集）も、大きな成果になると確信している。

望む望まないは別にし、これからも規模は拡大し、十勝でさえ、限界集落が出てくることは避けては通れない。農村振興と産業振興の高度な両立は簡単に答えを見いだすことのできない古くて新しい問題だが、体験農業やファームステイが、そういった課題に応えるヒントになると思う。

女性の感性で農村を強く

外山　女性ならではの感性を、農業・農村の中にさらに吹き込むことで農業・農村はより力強くなっていく。ＴＰＰに負けない十勝を皆で一緒につくりたい。

若い農家女性は専業主婦が多く、両親と別居が増えた。私たちの時代は同居で、家族と話しながら学ぶ助走期間があった。今は情報を夫が伝えないと、若妻は農業経営について知り得ない。経営者のパートナーとなるとき、すぐ戦力となるのかが大きな課題だ。ＪＡや行政が若い女性を教育する仕組みが必要ではないか。若い人は農業以外の仕事に就いてから、嫁ぐ人がほとんど。農業・農村を別の視点から捉える感性を持っている。その感性を生かし、経営のパートナーとしての資質向上を図るのが大切だ。

農業は生産にとどまらず、６次産業化や食や景観を生かした観光などまだまだ可能性がある。可能性に向かってチャレンジしていきたい。

ＴＰＰ受けて立つ意気で

山口　ＴＰＰを含め心配はあるが、十勝は日本の先頭を走っている。十勝の農業がつぶれるようなら、日本の農業はありえない。堂々と受けて立つつもりで、前向きに取り組むべき。

十勝全体を見ると、農業だけ強ければいいわけではない。ＴＰＰなど自由化は観光、産業含めて大きな影響を受ける。農村景観を含め農業と観光がうまく組み合わさり、海外からの観光客誘致につながれば、十勝はさらに発展する。

酪農はそれぞれの考え方で将来を目指すべき。十勝は全てニュージーランドのような酪農ができるわけではない。後継者が戻るかは、しっかりした所得があるかどうか。これからも農業生産額は伸びていく。心配はしていない。

個性と自分の考え大切に

矢野　農業が好きで、父親の後を継いでやってきたが、娘２人が農業を継がないので、妻と２人で農業を閉じることになる。妻と始めたときから理想はあった。若いころに訪れたヨーロッパの印象が強い。100年以上たった農家の住宅、窓に花があり、農業がつくる景観が素晴らしかった。農業でしかできない、他の職業にはできない農業のよさがある。何とか自分の代でも理想を実現したいと思っていたが、たまたま農業団体で長く仕事をしてしまい、できなかった面もある。

十勝の農業はＪＡ取扱高3000億円を目指していくとは思うが、農家の経営は一人ひとり違うわけだから、独自性を持って自分の考えで取り組んでほしい。個々の判断の集大成が十勝の農業だ。

国際化などの困難に打ち勝っていくには経営能力、技術に加え、自ら手を汚して体を使っていくこと、この三拍子が大切だ。



◆外山　聖子 氏

1959年宮城県生まれ。酪農学園酪農短期大卒。結婚後、農業（帯広市美栄町、35.6㌶）に。2004年に夫の勝則さん（48）が急逝し、４人の子供を育てながら、農場を守ってきた。



◆平　　和男 氏

1965年新得町生まれ。道立農業大学校（本別町）を卒業し86年に就農。経営面積は33.5㌶。2004～05年道農協青年部協議会会長、05年全国農協青年部協議会副会長